

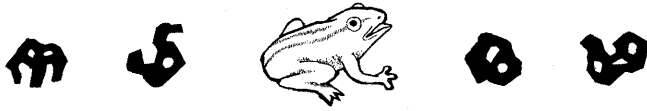


黄色い自動車

—— 存在と非存在の問い ——

津守 真

子どもがどうしてもあることをしたいと言い張るとき、それに応えるのには大きなエネルギーを要する。大人はそんなに心身の労を払ってまで応えなくてもよい理由をいくらかでも考え出すことができる。しかし人生の探究者であることにおいて、子どもは大人以上に真剣である。真剣な要求は大人も本気で応えることを要する。表現は異なっても、子どもの世界は大人が生きる真実と底辺において共通である。



十三年前の朝、庭で、J夫は玩具の黄色い自動車を砂場のへりに置き、自分は砂場に座ってそれを見ていた。私は少し離れてそれを見ていた。子どもがひとりで何かをじっと見ている時間と空間をたいせつにしたいと思ったのである。そこにT夫が来て、その黄色い自動車を手に取った。私はJ夫が怒るだろうと思ってハッとしたり。J夫はすぐに立って自動車を取り返し、もうひとりの子どもはまたそれを取り返し、二人の間で緊張が生じた。私は急いでほかの自動車をもってきたが、ふたりとも見向きもしなかった。両方とも黄色い自動車に固執していることが分かった。そのうちにT夫は黄色い自動車をもって歩き始め、J夫は白いバトカーを黄色い自動車のあった場所に置いて眺めはじめた。

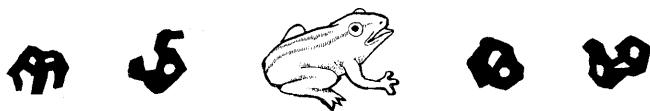
J夫と私とはその前一年以上の付き合いがあり、一見奇妙な彼の行動をどう理解したらよいかを分からないでいた。J夫は大人の自転車の後部の荷台に乗るのを好んだ。そのときに自転車の走る場所によろや、やかん、玩具の自動車、シャベルその他の物を置いて、すれすれのところを通過することをJ夫は要求した。それにぶつかったり動かしてはいけない。遠くを通るのもいけない。だからJ夫を乗せて自転車を走らせるのに付き合うのは大変だった。ときどき小さい子どもの足元にすれすれに物を投げるので危なくて目が離せなかった。かかわっているそのときには、理



由はわからないけれども、J夫を自転車の荷台に乗せて走りながらも、こんなに強く欲している子どもの思いをできるだけ叶えたいということ、他の子に危険がないようにすること、で精一杯だった。私は彼の激しい行動の裏にあるのは何かを分かりたいという切迫した思いをもった。

この日、J夫は黄色い自動車を砂場の縁に置いて見ていた。特にその場所を選んで置いているように思えた。「置く」というのは、自分の手の中とは違う空間、自分から距離を離れた空間に据えることである。ある特別な場合にはそれは床の間や神棚、祭壇など聖なる空間である。この場合には砂場の縁石に過ぎないのだが、J夫にとってはその特定の場所に意味があるように思えた。

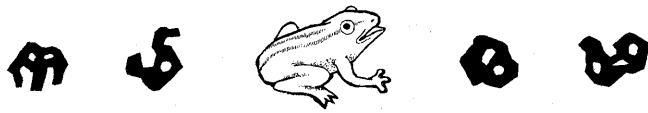
じっと見ているこの子どもには、黄色い自動車だけが見えていて、その他のことは見えていない。よく見ると、砂場の縁石の幅は狭く、ちょっと触れたら自動車は落ちそうである。J夫は自動車そのものを見ていたのではなく、それが縁石から落ちるか落ちないかの境界を見ていた。換言すれば彼に見えていたものは彼の精神生活の中でしぼられた一点で、それは物の存在の確かさについてであるように思えた。私は自転車を走らせているときも同様であることに気が付いた。自転車が物にぶつかればその物は置かれた場所には存在しなくなる。自転車でスレスレのところを走るとき、彼



はその物が存在しなくなるかどうかの境界を確かめているのではないか。

そのころ私は大学をやめる直前で、人間の存在の確かさは何によって得られるかを考えていた。保育の実践の場では、保育者の個人的な事情からはできるだけ離れて、そのときの子どもの交わりに専念することを要するが、その上でなお、保育者自身が探求している課題や関心から自由になることはできない。このときは、J夫と付き合いなから、彼の中にあるであろう疑問、存在と非存在、beingとnon-beingとの境界にある不安定さを理解するには適した私自身の内的状況だったのだと思う。発達が遅れていると言われことばをもたない子どもは、社会で確立した位置をもつ教師とは全然違った場所に立っている。社会の中での存在感はもちろん、自分自身の存在の確かさも、私共大人とは比較にならないほど薄いだろう。そう思ったとき、J夫と付き合いながらも、彼自身の存在を確かにするのに私がどうすればよいかを考えるようになった。

存在と非存在の危機は、人の生涯のどの段階にも生じる。その危機に遭遇したときにはだれでも真剣にそれに向き合う。結婚あるいは離婚によって生活環境が変わったとき、若い人にも自分の足元の存在感が揺るがされるときがあるだろう。老年期に、社会的仕事を終えて生活様式の変化に遭遇するとき、人は一生涯を見渡して新たなア



アイデンティティを再び作り直さねばならない。そのような存在と非存在の境界にある不安定さは、人生のどこでも起こるのだが、子どもときには、自分の過去との関係でアイデンティティを見出すのではない。現に生きている直接の周囲の人や環境の中で自分が価値あるものと認められることによって自分のアイデンティティが作られるので、保育者の存在は特別に重要である。

J夫とはこの後更に付き合いは続くが、これから十数年後、彼が造形教室から展覧会に出品した絵に私は魅かれた。絵の具で四角い枠を描き、その縁の内側と外側に沿ってスレスレに太い線が塗られていた。自転車で物にぶつからないようにスレスレに走った、あのときに切迫感をもって探求した存在と非存在の境界は絵のモチーフとして彼の心に生きている。J夫はいま、言葉話さないが、文字に書いて意志を伝える、ひとりで作業所に通う立派な青年である。存在、非存在の問いは、人間の生涯のはじめに確かにされることを要し、人生の各段階で新たに確認されていく課題である。

(愛育養護学校)